

新聞4コマ漫画が描く野田佳彦首相（後編）  
首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2011～2012

Prime Minister Yoshihiko Noda in Newspaper Comic Strips (Part 4):  
An Analysis of Comic Strips in the Three Major  
National Newspapers in Japan 2011-2012

水野 剛也  
Takeya MIZUNO

はじめに 前編・中編-1・中編-2の要約と後編のねらい

本論文は、野田佳彦首相の在任期間中（2011年9月2日～2012年12月26日）に3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本誌第56巻・第2号（2019年3月）に掲載した前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰した。

それをふまえ、第57巻・第1号（2019年12月）に掲載した中編-1では、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）を、さらに第57巻・第2号（2020年3月）に掲載した中編-2では、『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）と「オフィス ケン太」（夕刊）、そして『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）を質的に分析した。

本号に掲載する後編では、『朝日新聞』の「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析する。つづく結論（筆者の所属変更により、他の学術雑誌に掲載予定）では、それまでの分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示するつもりである。

1 本論文の目的・方法・意義、および構成

本誌第56巻・第2号（前編）に掲載。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本誌第56巻・第2号（前編）に掲載。

### 3 新聞4コマ漫画が描く野田首相

- ・アサッテ君 (東海林さだお)『毎日新聞』(朝刊) 本誌第57巻・第1号(中編-1)に掲載。
- ・ウチの場合は (森下裕美)『毎日新聞』(夕刊)

- ・コボちゃん (植田まさし)『読売新聞』(朝刊) 本誌第57巻・第2号(中編-2)に掲載。
- ・「オフィス ケン太」(唐沢なをき)『読売新聞』(夕刊)

- ・ののちゃん (いしいひさいち)『朝日新聞』(朝刊)

#### ・地球防衛家のヒトビト (しりあがり寿) 『朝日新聞』(夕刊)

『朝日新聞』の夕刊で連載されている「地球防衛家のヒトビト」(しりあがり寿)は、家庭的な要素を多分に含みながらも旺盛な時事性・風刺性を特徴とする4コマ漫画である。「地球防衛家」は、社員の父親・トーサン、専業主婦の母親・カーサン、社員の長女・ムスメ、小学生の長男・ムスコからなる4人家族で、作者自身の説明によれば、「フツウの生活を送りながらも、世の中をよくしたいと正義感に燃える、いわばどこにでもいるような家族」である。彼ら以外にも、近所の人々、会社の上司や同僚、学校の先生や同級生、皮肉屋の「カエル」など、多彩なキャラクターが登場する。連載がはじまったのは小泉純一郎政権時の2002年4月で、2012年4月に10周年、2017年に15周年、2019年4月8日号には連載5,000回を迎え、本論文執筆時点(2020年10月)でもなお継続中である。<sup>43</sup>

野田の登場機会は歴代の首相と比べ少なかったものの、「地球防衛家のヒトビト」において、首相はほとんど常連のキャラクターといってもいいほどである。連載10周年を迎える直前の2012年3月、過去の作品を1年ごとにふり返る特集記事が『朝日新聞』に掲載された際には、再掲された代表作10本のうち2本に首相(小泉純一郎と安倍晋三=第1次)が描かれている。この事実からも、「地球防衛家のヒトビト」にとって首相が欠かせない登場人物であることがわかる。<sup>44</sup>

作者のしりあがり寿(本名・望月<sup>としき</sup>寿城)は、新聞4コマ漫画に限らず多領域で活躍している漫画家である。1958年に静岡県静岡市で生まれたしりあがりは、1981年に多摩美術大学を卒業後、ビール会社に勤めながら漫画を執筆・発表しつづけた。1994年に退職後は漫画家業に専念している。他の代表作に、『流星課長』(竹書房、1996年)、『ヒゲのOL薮内笹子』(竹書房、1996年)、『時事おやじ2000』(アスキー、2000年)、『弥次喜多 in DEEP』(エンターブレイン、2000~03年)、などがある。2011年3月の東日本大震災、および東京電力福島第一原子力発電所事故に際しては、直後から関連する諸問題を積極的に漫画化し、作品集『あの日からのマンガ』(エンターブレイン、2011年)や『ゲロゲロプースカ』新装版(エンターブレイン、2012年)などを出版している。また、自身の仕事について論じた『表現したい人のためのマンガ入門』(講談社現代新書、2006年)やエッセー集『人並みといふこと』(大和書房、2008年)など、漫画以外の著作も複数ある。第46回文藝春秋漫画賞(2000年)、第5回手塚治虫文化賞マンガ優秀賞(2001年)、第15回文化庁メディア芸術祭優秀賞(2011年)、紫綬褒

章（2014年）などの受賞（章）歴、そして神戸芸術工科大学などで教歴もある。<sup>45</sup>

野田の在任期間中、「地球防衛家のヒトビト」は4本の作品で首相を描いているが（1.03%＝386本中4本）、注目すべきは、頻度・本数とも、はじめて「アサッテ君」（『毎日新聞』朝刊）のそれ（1.13%＝439本中5本）を下回ったことである。小泉政権時に連載を開始して以来、「地球防衛家のヒトビト」は首相を描く積極性において、「アサッテ君」をはじめ他のほとんどの漫画を大きく引き離してきた。前任者の菅直人を例にとると、「地球防衛家のヒトビト」の頻度・本数はいずれも、「アサッテ君」の約3倍である。<sup>46</sup>

とはいえ、「下回った」と表現したように、両者の順位が逆転した主因は「アサッテ君」がより活発に首相を描くようになったことではなく、「地球防衛家のヒトビト」の数値が大幅に低下したことにある。本論文の前編でも指摘したが、野田を描いた作品の頻度・本数（1.03%＝386本中4本）はともに、小泉以降の歴代首相の誰よりも低い。

表16 「地球防衛家のヒトビト」における首相を描いた作品の頻度と本数（首相別、上から頻度の高い順）

鳩山由紀夫	= 5.31% (207本中11本)
菅 直人	= 4.89% (368本中18本)
麻生 太郎	= 4.86% (288本中14本)
安倍 晋三（第1次）	= 3.72% (295本中11本)
小泉純一郎	= 3.10% (1,320本中41本)
福田 康夫	= 2.72% (294本中8本)
野田 佳彦	= 1.03% (386本中4本)

よりわかりやすくするために小泉から野田までを順位づけたのが表16であるが、野田は7人中最下位で、「もっとも描かれにくい」首相である。頻度・本数とも、第6位の福田康夫の半分以下、同じ民主党で、かつ「もっとも描かれやすい」鳩山由紀夫には頻度で実に5倍以上、本数で3倍近くも引き離されている。野田は「アサッテ君」でもけっして「描かれやすい」首相ではなかったが（7人中5位、本論文中編-1・表14参照）、「地球防衛家のヒトビト」での「描かれにくさ」は際立っている。野田は3大紙の4コマ漫画全体でも「もっとも描かれにくい」首相であるが、その最大の要因は「地球防衛家のヒトビト」にある。

とはいえ、小泉から野田までの7人全員を複数の作品で描いているのは、3大紙の4コマ漫画のなかでは「地球防衛家のヒトビト」と「アサッテ君」だけであり（本論文前編・表2参照）、両者を「時事的4コマ漫画」と特徴づける先行研究の分類は、依然として十分な妥当性を保持している。「もっとも描かれにくい」といっても、野田を描いた作品は4本ある。他方、4つの家庭漫画をすべてあわせても「コボちゃん」の1本だけで、その差は歴然としている。後述するように、「地球防衛家のヒトビト」には明らかに野田の言動を題材としている作品が複数あり、また現職だけでなく「元」首相や「次期」首相、そして国内外の他の多くの政治家をも登場させている。さらに、前任者

である菅の在任期間中に、野田は「次期」首相として2本の作品に登場している。これほど頻繁に実在する政治家を作品化している漫画は他にない。なお、同じ時事漫画でも、先行研究は「アサッテ君」を「世論反映型」、「地球防衛家のヒトビト」を「自己主張型」と区別しているが、この点についてはあらためて論じる。<sup>47</sup>

次に、野田を描いた作品の質的な分析に移るが、そこで有用なのが小泉から菅までの作品分析で先行研究が採用している準拠枠である。それによれば、「地球防衛家のヒトビト」は「自己主張型」の時事的4コマ漫画であり、首相の描き方のもっとも根本的な特徴は、首相の実際の言動や政策を主題とし、かつ強烈な風刺・批判を浴びせる、という点であった。この旺盛な時事性と風刺性を下地としていくつかの表現パターンが見られたが、野田の作品を分析する上でも、先行研究が見いだした以下の諸点は引きつづき有効である。

- 1 地球防衛家の面々をはじめ一般庶民に首相を語らせる。
- 2 他の政治家（海外の政治家も含む）と対比・並列して首相を描く。
- 3 非現実的な架空の舞台を設定し、そこに滑稽な人物として首相を登場させる。
- 4 作者自身のナレーションにより首相を風刺・批判する。

以後、作品の分析は上述の諸点を軸にすすめる。なお、「地球防衛家のヒトビト」では1本の作品に複数の表現パターンが混在している場合が多く、「アサッテ君」ほどはっきりとは類型化しにくい点をあわせて指摘しておく。

まず、地球防衛家の面々をはじめ一般庶民に首相を語らせる第1のパターンは、野田を描いた4本すべてに見られるが、典型例といえるのが2011年9月7日号（図16）の作品である。その5日前の9月2日に野田が正式に首相となり新内閣が発足したことについて、トーサンとカーサンが「財政を立て直すためにまず…」 「経費削減だね!!」と意気投合し（2コマ）、観光地にあるような「顔出し」パネルを使って閣僚の記念写真を撮影したらどうかと突飛な提案をする（3～4コマ）、という内容である。野田政権の

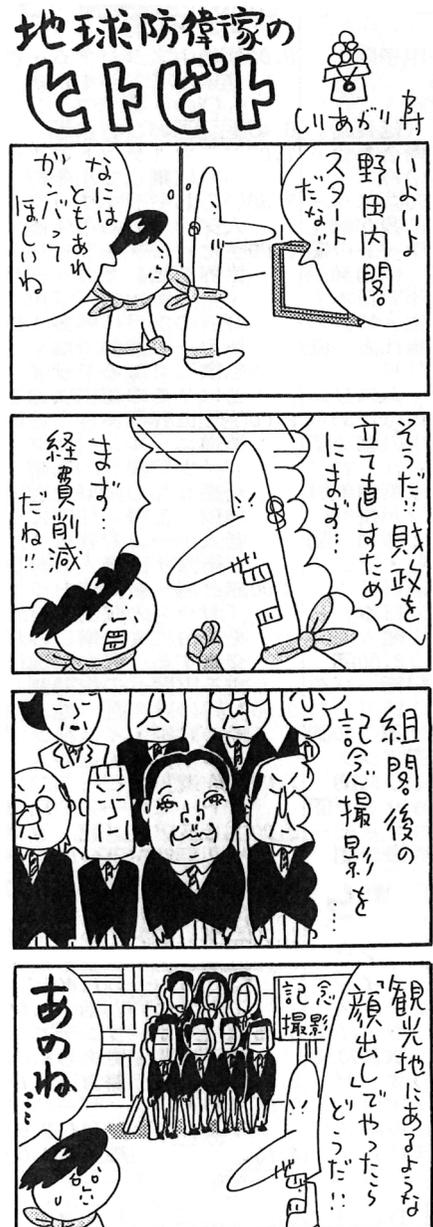


図16 2011年9月7日号

発足から1週間も経っておらず、具体的な政治批評・風刺がなされているわけではないが、登場人物は首相について熱心に語っている。この作品については、トーサンとカーサンがテレビの視聴をきっかけに野田について語りあっている点（1コマ）にも留意しておくべきである。なお、「顔出し」パネルと閣僚の記念撮影という題材は、パターン3の事例として分析する2012年10月4日（図22）の作品でも用いられている。

第1のパターンが認められるもう1つの好例として、就任当日の2011年9月2日号（図17）の作品も紹介しておく。「ねー うし とら」、「うー たつ みー」（1～2コマ）につづき、「アベ フクダ アソウ」、「ハトヤマ カン ノダ〜」（3～4コマ）となえるムスコに、カーサンが「十二支と総理をいっしょにすんじゃないよ」（4コマ）と注意する、という内容である。ムスコに歴代の首相の名前を連呼させることで、昔の辞任により安倍（第1次）以降、5人連続して1年ほどで首相が交代する事態になったことを揶揄している。

なお、カーサンの左横にある「たしかに毎年」「かわってるけど」（4コマ）という文章は、吹きだしの外に書かれているため、カーサンの心情を補足的に表現する言葉、あるいは第4の表現パターンである作者自身によるナレーションと読むことも、あながち不可能ではない。ナレーションを用いた表現方法については後述する。

ところで、図17で「ノダ〜」と口にしてしているのは小学生のムスコであるが、先行研究もくり返し指摘しているように、「地球防衛家のヒトビト」では、大人ばかりでなく「子供」も首相について積極的に発言する。最高権力者である首相を、あえて社会的地位では対極にある「子供」の視点からとらえることで、政治的な批評性・風刺性をいっそう高めていると考えられる。この漫画では、小学生を含め老若男女が実に積極的に首相を批評・風刺する。

加えて、ムスコの台詞にでてくる人物名がすべて「カタカナ」で表記されていることも、「地球防衛家のヒトビト」の首相描写を理解する上で看過できない。というのも、安倍（第2次）政権時に衆議院特別委員会の法案審議を傍聴した際、『朝日新聞』の取材に対して作者のしりあ



図17 2011年9月2日号



図18 2011年9月30日号

がりは、難解な用語などを「ひらがなにすると重要なことがマスキに見えて面白くなる」と答え、批判・風刺の技法としてあえて漢字を使わない場合がある、と語っているからである。首相名を子供の口から、しかもカタカナでいわせることで相乗効果をねらっている可能性がある。<sup>48</sup>

野田を描いた4本のなかでは図17しか該当しないが、子供が政治家や政治問題について語る作品は少ない。たとえば、2011年9月30日号(図18)の作品は、「世界恐慌」を心配するムスコたち小学生が「オトナがなんとかしてくれる」(1~2コマ)、そして大人であるトーサンが「ははは世界のエライ人がなんとかしてくれるよ」(3コマ)と期待する一方、肝心の「世界のエライ人たち」が「あーでもない」「ギヤー」「ギヤー」「こーでもない」「ギヤー」(4コマ)といい争っている、という内容である。「オトナ」と「エライ」を漢字ではなくカタカナで表記していることも含め、政治に関してはほぼ無知・無力であると考えられる子供の視点をもち込むことで、対立してばかりいる世界の政治指導者たちをより鋭く皮肉っているといえる。<sup>49</sup>

分析を図17に戻すと、他の政治家(海外の政治家も含む)と対比・並列して首相を描くという第2の表現パターンも同時に使われている。とくにこの作品は、野田を含め安倍(第1次)以降の首相経験者を一堂に描いている点で、本論文にとっては<sup>かつもく</sup>刮目に値する。少なくとも小泉政権以降、本論文の分析時間枠まで、複数の「首相」を1本の作品に登場させている新聞4コマ漫画は「地球防衛家のヒトビト」以外にはない。野田に限っては頻度・本数ともに「アサツテ君」を下回ったものの、

首相を描くことにおいて「地球防衛家のヒトビト」がいかに積極的かを象徴的に示す作品である。<sup>50</sup>

上述の点に関連して、「地球防衛家のヒトビト」は首相に就任する以前にも、野田を「次期」首相として2本の作品に登場させている。民主党代表選挙(2011年8月29日)で勝利した直後の8月30日号(図19)と9月1日号(図20)の作品がそれで、テレビの報道をきっかけにしてカーサンとトーサンが野田について語っている。図20は、民主党幹事長となる予定の<sup>こしいあずま</sup>興石 東 民主党参議院議員会長も



図19 2011年8月30日号

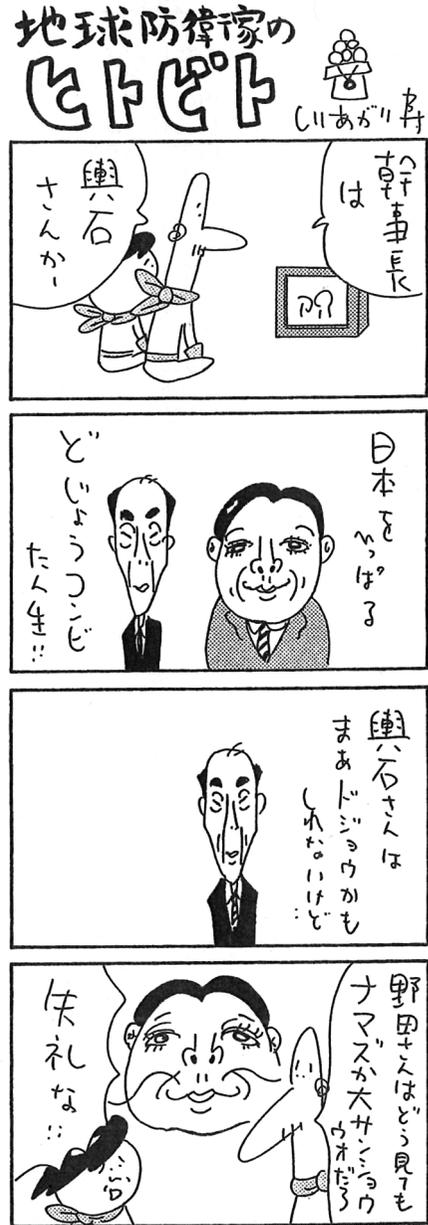


図20 2011年9月1日号

描いている。すでに辞任は表明していたものの、この時点では依然として菅が現職の首相である。在任期間中に描いた頻度・作品数こそ以前よりも少ないが、現職であるか否かを問わず、「首相」を含め政治家を登場させることに対し、この漫画は総じて積極的である。<sup>51</sup>

さらにいえば、野田から見て「次期」首相となる安倍晋三（第2次）も、就任前の野田を上回る3本の作品に登場している。いずれも将来、安倍を事例とする研究がなされる際には分析に含めるべき



# 地球防衛家の ヒトビト

いしがり 軒

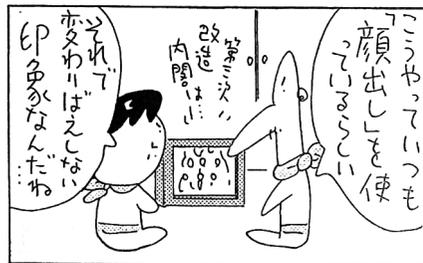
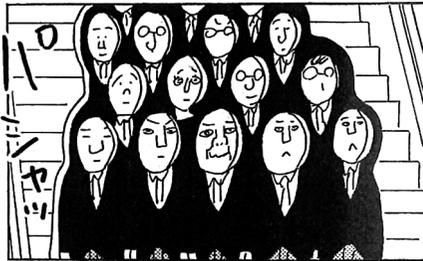
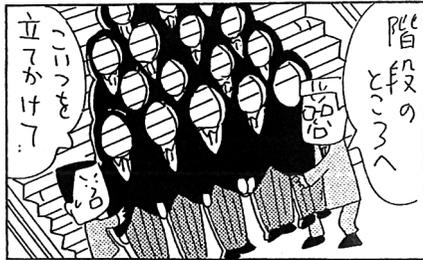


図22 2012年10月4日号

# 地球防衛家の ヒトビト

いしがり 軒

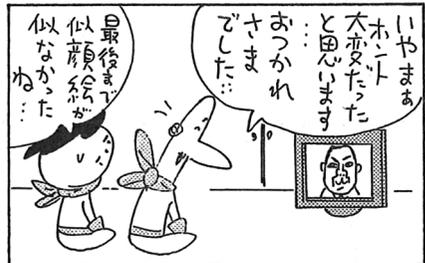


図23 2012年12月20日号

いるわけではないため、フィクショナルな設定で首相を描く第3の手法が使われているとはいえない。

もう一例、頭をかかえて苦悩する退任直前の野田を描いた2012年12月20日号（図23）の作品にも、わかりやすい形で第3のパターンが用いられている。「沖縄の米軍基地」「大震災復興」「消費税」（1～3コマ）など、「もうこれでもかってくらい…」（3コマ）多くの難題に見舞われ、「さらに尖閣問題」「もうダメ!!」（3コマ）と呻吟する野田の姿は、それらの問題に直面していたことは事実であるものの、あくまで作者がつくりあげた架空の像である。追加的に、地球防衛家の面々が首相を語る

第1の表現パターンも使われていること、さらに彼らが視聴するテレビ画面のなかに首相が描かれている点(4コマ)にも留意しておく必要がある。

先行研究は、現実にはありえない状況設定で首相を皮肉る手法が、政治批評そのものを目的とする1コマの風刺漫画と類似性がある点に着目し、これを「地球防衛家のヒトビト」が「自己主張型」の時事漫画であることを補強する要素の1つとしてとらえている。数こそ多くないものの、野田を描いた作品にも同じ特徴が認められる。

ところで、図23でトーサンたちは野田について語る際にテレビ画面を通してその姿を見ているが(4コマ)、マス・メディアが伝える首相を庶民が見知る・語るという構図は、「地球防衛家のヒトビト」を含め新聞4コマ漫画で広く用いられる、注目すべき特徴の1つである。図16と図22も類似した構図を採用しているし、見方によっては、カーサンが新聞を読んでいる図17も同種といえるかもしれない。また、首相に就任する以前の野田を描いた図19はあきらかに該当するし、図20にも似た構図が見られる。さらに、本論文の中編-1と中編-2で検討したように、首相を描いた「アサッテ君」(5本)と「コボちゃん」(1本)の作品すべてにも共通する。この点は、本誌次号以降に掲載する予定の結論でもあらためて論及する。

図23についてももう1つ重要な点は、数々の難問に見舞われたすえに総選挙で大敗し、政権を明けわたすことになった野田が、やや同情的な文脈で描かれていると読めることである。トーサンが頭を下げ、「いやまあホント大変だっと思います…おつかれさまでした!!!」(4コマ)という台詞がそれである。先行研究がくり返し指摘しているように、これまでの「地球防衛家のヒトビト」には、「首相の実際の言動や政策を主題とし、かつ強烈な風刺・批判を浴びせる」という特徴がほぼ一貫して見られた。いくら政権運営に難航したからといって、首相の労をねぎらうような言葉を含む作品はきわめてめずらしい。

この一例だけをもって結論づけることはできないが、野田が「もっとも描かれにくい」首相となった要因として、「批評・風刺」の対象となりにくかった、という解釈も成立するかもしれない。すでに紹介した図16ではカーサンが「なにはともあれガンバってほしいね」(1コマ)、そして図19でも「ここはひとつホントによろしくお願いします」(4コマ)と期待感を表明している。図23とあわせて考えれば、「地球防衛家のヒトビト」にとって野田は、「期待」を背負って就任したものの多くの問題に阻まれ退陣を余儀なくされた、「批評・風刺」よりも「同情」すべき首相で、ゆえに「もっとも描かれにくい」首相となったのかもしれない。

第4の表現パターン、つまり作者自身のナレーションにより首相を風刺・批判する作品は存在しなかった。しかし、このこと自体はけっして不自然ではない。先行研究も指摘しているように、首相を描きながらこの手法が使われていると明言できる作品は「地球防衛家のヒトビト」でさえも多くはなく、それ以前には小泉・安倍(第1次)・麻生・菅の在任期間中にそれぞれ1本ずつ(2005年10月20日号、2007年9月13日号、2009年7月22日号、2011年6月4日号)、合計で4本しかない。「もっとも描かれやすい」鳩山でさえ、明言はできないが、作者のナレーションと読むことが十分に可能な作品

が1本（2009年11月27日号）あるだけであった。「もっとも描かれにくい」野田に1本もないことは、まったく驚くにあたらない。

とはいえ、首相が描かれていなくとも、第4の表現パターンが使われている作品は野田の在任期間中にも複数存在する。代表例として、2012年3月9日号（図24）と2012年8月8日号（図25）の作品を紹介しておく。東日本大震災から1周年を迎えるにあたり描かれた図24は、地球防衛家の全員が集合し、「あの日もこうやってテレビの前に集まっていたなあ……」（4コマ）というナレーションで終



図24 2012年3月9日号



図25 2012年8月8日号

わっている。震災発生直後の2011年3月14日号の作品と酷似する内容で、大災害以後の時間の経過に対する作者の感概を表現したものと思われる。図25は、トーサンが新聞を読みながら、消費税増税や衆議院解散をめぐる議論が百出している状況に混乱するあまり、「アイス溶けるよ」(1、2~4コマ)というカーサンの忠告が耳に入らない、という内容である。そして最後に、「こうして何もかもが溶けていきそうな夏の日でした…」(4コマ)というナレーションが提示される。増税や解散めぐり与野党が激しく論戦していた当時の政治状況を、登場人物の台詞ではなく、作者自身の言葉により批評・風刺している。<sup>54</sup>



図26 2012年6月29日号

本論文にとって上述の2本の作品が重要なのは、ナレーションの使用が他の漫画にはめったに見られぬ「地球防衛家のヒトビト」の独自性であり、先行研究がこの漫画を「自己主張型」の時事的4コマ漫画と特徴づけてきた最大の理由だからである。登場人物の台詞ではなく作者のナレーションとして提示される文章は、漫画という形式をとってはいるが、ほとんど作者自身の意見表明と読むことができる。その意味で、ナレーションは「自己主張型」の真骨頂を示す表現手法なのである。

なお、ナレーションに近い表現方法として、作者はしばしば皮肉屋の「カエル」に自身の見解を代弁させる場合もあるが、野田の在任期間中にも4本の作品でこの表現方法を用いている。いずれも本論文が定義する「首相を描いている作品」にはあてはまらないが、そのなかの1本(2012年6月29日号、図26)は、「ショーヒゼイ」(3~4コマ)と連呼して騒ぐ「ニンゲン」(3コマ)たちを映すテレビを眺めながら、カエルがあきれたように「何年も何年も一年中ずーっと同じことを鳴き続けてるね……」(4コマ)と皮肉る、という内容である。図23も描いているように、消費税増税は野田がもっとも悩まされた政治的課題の1つである。人間と同じ言葉で政治批評をする「カエル」の存在も、この漫画が「自己主張型」であることを補強する有力な要素である。加えて、この作品では既述したカタカナ表記の技法が使われている点も見逃せない。<sup>55</sup>

これまでの分析・知見を総合すると、野田の在任期間中にはナレーションを使って首相を批評・風刺する作品こそなかったものの、その事実だけをもって、先行研究が一貫

して採用してきた「自己主張型」の分類を変更する必要は見いだせない。既述のとおり、作者自身の言葉がそのまま提示される作品は、野田政権中にも依然として複数存在している。また、首相を描いた作品のなかでも、前述した図17には「たしかに毎年」「かわってるけど」（4コマ）という登場人物の台詞とは必ずしも読めない言葉が書き込まれている。明確に作者のナレーションとはいいい切れないが、少なくともそれに近い表現が使われていると解釈することは可能である。「カエル」の存在も含め、これらは他の新聞4コマ漫画ではめったに用いられない独特な描き方である。首相こそ登場しないが、「自己主張型」の時事漫画という「地球防衛家のヒトビト」らしさは健在である。

上述の点をさらに補足すると、野田の在任期間中の「地球防衛家のヒトビト」をより十全に理解するためには、本論文が定める「首相を描いている作品」には該当しないが、しかし首相の存在を強く示唆する作品にも目をむける必要がある。定義に合致する作品はわずか4本でも、明らかに野田の存在や言動を意識した作品は複数あり、総体として旺盛な批評性・風刺性を発揮していると考えられるからである。

代表例の1つとして、首相の「原発事故収束」宣言を痛烈に批判する2011年12月22日号（図27）の作品は見逃せない。これに先立つ12月16日に野田は、東京電力福島第一原子力発電所の原子炉が「冷温停止状態」に達したとして、「事故の収束」を宣言していた。これを新聞で読んで知ったカーサンが、「やったーみんなよくガンバったー」「これでもう大丈夫だー！！」（2コマ）と喜び、カーサンと手を取りあって踊りだすと思いきや、「なんて安心すると思ってるのかね…」「ホントだよ…」（4コマ）と腕を組み困惑した表情でつぶやく、という内容である。首相その人を直接的に示す言葉こそないものの、野田の「収束」発言を題材とし、かつそれに異議をと立てていることは疑いようがない。この作品と同様に、実際にあった首相の言動を批判的に取り入れている作品は他にもある。本論文が定義する「首相を描いている作品」でなくとも、明らかに首相の存在を意識している作品は少なくないのである。<sup>56</sup>



図27 2011年12月22日号

表17 「地球防衛家のヒトビト」のシンボル使用 (首相別)

	画像のみ	文字のみ	画像と文字 (併用)
小泉	16本	14本	11本
安倍 (第1次)	4本	1本	6本
福田	2本	1本	5本
麻生	4本	3本	7本
自民党合計	26本	19本	29本
鳩山	6本	2本	3本
菅	2本	7本	9本
野田	2本	1本	1本
民主党合計	10本	10本	13本
全体の合計	36本	29本	42本

野田を示すシンボル (画像・文字・画像と文字) に目を転じると、画像のみ = 2本、文字のみ = 1本、併用 = 1本と、そもそも数が少ないとはいえ、画像と文字が偏りなく使われていることがわかる。なお、民主党の他の首相と比較すると (表17)、鳩山では画像が、逆に菅では文字がより多く用いられており、その中間でバランスがとれているのが野田だといえる。

シンボル使用における偏りの少なさは、首相別に数値をまとめた表17からもわかるように、全体にわたり共通する特徴でもある。確かに、小泉から野田までの7人を合計すると画像が文字を上回るが (画像のみ = 36本、文字のみ = 29本、併用 = 42本)、かといって文字が極端に少ないわけではない。政党別に比較しても同じことで、自民党の首相ではやや画像が多いものの大きな差があるとまではいえず (画像のみ = 26本、文字のみ = 19本、併用 = 29本)、野田を含めた民主党の首相では完全に均衡がとれている (画像のみ = 10本、文字のみ = 10本、併用 = 13本)。全体としては、シンボル使用に目立った特徴は見いだせない。

ただし、しりあがり寿は過去の作品で画像を使って首相を描くことに意欲を示したことがあり、首相によっては単純に容姿の「描きやすさ (にくさ)」がシンボル使用に影響を与えている可能性も捨て切れない。安倍晋三 (第1次) が突然に辞意を表明した直後、しりあがり寿は作品中 (2007年9月15日号) に「某漫画家」を登場させ、次は「似顔絵の描きやすい首相がいいよ～」と語らせている。「某漫画家」が作者自身であることは明白で、外見的な「描きやすさ (にくさ)」を重視していることがわかる。画像が文字を上回る小泉・安倍 (第1次)・鳩山などは、作者にとって容貌が描きやすかった可能性がある。<sup>57</sup>

さらにいえば、野田が「もっとも描かれにくい」首相となったことも、同じく顔や身体の「描きにくさ」で説明できなくもない。しりあがり寿は、野田を描いた最後の作品 (2012年12月20日号、図23) で、カーサンに「最後まで似顔絵が似なかったね…」 (4コマ) といわせているからである。この発言に照らせば、少なくとも作者にとっては、野田は単に「似顔絵を描きにくい」首相だったのかもしれない。

れない。もっとも、漫画家から見た画像としての首相の「描きやすさ（にくさ）」は、すぐれて主観的な要素であるため、少なくとも本論文だけでは実証的に突きとめることのできない問題である。

いずれにせよ、本論文の前編でも指摘したように、「地球防衛家のヒトビト」に限らず新聞4コマ漫画のシンボル使用については未解明の部分がおお多く、今後もさらに研究を継続し、分析を深める必要がある。野田の後任者で自民党の安倍（第2次）、菅義偉、さらにそれ以降の首相についても、シンボル使用は継続的に考察すべき課題である。

あらためてこれまでの分析・知見をまとめると、首相を作品化することにおいて他の漫画を凌駕してきた「地球防衛家のヒトビト」において、野田は「もっとも描かれにくい」首相であったものの、作品を総体的に見わたせば、それ以前と同程度に旺盛といえる批評・風刺性を発揮しており、その描き方も多様で独自性に富むことがわかった。野田その人を描いた頻度・本数こそ「アサッテ君」のそれを下回ったが、現職ばかりでなく歴代や次期の「首相」まで登場させている事実を目をむければ、他の漫画と比べて首相を描くことにはるかに積極的だという、これまでの評価は揺るがない。先行研究が示した首相描写のパターンわけについても、妥当性が十分にあることが確かめられた。

また、「地球防衛家のヒトビト」を「自己主張型」の時事的4コマ漫画と位置づける先行研究の分類についても、その妥当性を支える知見こそあれ、変更する必要は見いだせなかった。「首相を描いている」わけではないが、作者自身のナレーションが提示される作品は複数存在したし、首相を描いた作品のなかにも、図17のように同種の表現手法が使われていると解釈できるものがある。人間と同じ言葉で政治批評をする「カエル」を含め、作者自身の見解を比較的にはっきりと示すこれらの作品は「地球防衛家のヒトビト」独自のもので、他の漫画にはめったに見られない。登場人物が実に饒舌に首相を批評・風刺することや、1コマの政治風刺漫画のように架空の首相を滑稽に描く作品があることも、「自己主張型」の特徴を補強している。

しりあがり自身、漫画を「自己主張」の手段として認識している旨の発言をしている。2014年に紫綬褒章を受けた際のインタビューで彼は、「僕は本当はあまのじゃくでシニカル」、そして「社会がこわばらないよう、権威に対して、右からも左からも、痛いところを突くのが時事漫画の役割」であるとのべた上で、「普通の人を感じることを表現してきた」と語っている。時事漫画家としての自覚をもち、市井の市民として自分なりの社会・政治観を作品内で意識的に表明していることがわかる。<sup>58</sup>

さらに議論をすすめれば、現職ばかりか歴代や次期の「首相」まで登場させ風刺・批判している点、そして「自己主張型」としての特徴が顕著であるという点で、「地球防衛家のヒトビト」はジャーナリズムの権力監視・番犬機能を意識的に発揮しようとする4コマ漫画だといえる。先行研究が指摘しているように、作者もそのことを認めている。たとえば、2004年の『朝日新聞』のインタビューで彼は、「もう少しマシな世の中になくちゃって、今、みんな考えてるんじゃないか。……そういうヒトビトの代表のつもり、かな」と語っている。その4年後に出版したエッセー集でも、「自分の笑いは『覚醒』」、つまり権威や権力を引きずり降ろすような「プラスの価値をリセットする」<sup>かいぎやく</sup>諧謔であると書いている。作者は同じエッセー集で、「新聞に載る四コママンガやちょっとした

時事ネタのカットを描くとき、それぞれの事件に対する『人並み』の反応を探す」とも書いているが、この姿勢は一般庶民に代わり権力者の言動に目を光らせる、つまり原初的なジャーナリズムの権力監視・番犬機能に通じるものだと見える。<sup>59</sup>

最後に、歴代の首相と野田の描き方に何らかの違いがあるとすれば、1本だけではあるが、「批評・風刺」というよりも「同情」していると解釈できる作品があった点は注視に値する。頭をかかえて苦悩する退任直前の野田を描いた図23がそれで、カーサンが首相就任を控えた野田に期待感をにじませている図16・19とあわせて考えれば、「地球防衛家のヒトビト」にとって野田は、「期待」を背負って就任したものの多くの問題に阻まれ退陣を余儀なくされた、「批評・風刺」よりも「同情」の対象に近い首相だったのかもしれない。その蓋然性を裏づけるには明らかに材料不足ではあるが、野田が「もっとも描かれにくい」首相となった一因としても、一考に値する解釈である。

注

43 「新連載マンガ『地球防衛家のヒトビト』 来月1日から『朝日新聞』2002年3月25日夕刊。

44 「地球防衛家のヒトビト 笑って憂えて10年」『朝日新聞』2012年3月27日夕刊。

45 しりあがりの経歴については、「シリーズ人間 不安だから 怖いから『未来』が描ける」『女性自身』2011年12月27日号：62～68が詳しい。

46 野田を描いた4本は、以下の号に掲載されている。2011年9月2日号、2011年9月7日号、2012年10月4日号、2012年12月20日号。

47 「地球防衛家のヒトビト」が時事漫画であることについて、しりあがり自身も2018年の対談で、「連載を始めるとき、新聞は社会に興味がある人が読むものだから、時事問題にこだわろうと思いました」と語っている。（『地球防衛家』AIにも描ける？ 連載5千回？ 特別対談『朝日新聞』2018年12月3日。）

48 「ウオッチ安保国会『憲法のギリギリ』議論 見えた」『朝日新聞』2015年6月6日。

49 似たような作品は他にもある。2011年9月13日号の作品では、夏休みの宿題を忘れたムスコに対しトーサンが、「震災から半年すぎても」「復興や放射能の問題や、財源や…エネルギー政策や…」「オトナも宿題やってないぞーっ!!」と叫んでいる。2011年11月11日号、2012年6月2日号、2012年6月25日号、2012年11月6日号、2012年11月10日号、2012年12月14日号の作品でも、子供たちが政治家や政治問題について語りあっている。

50 補足的に、「首相」に限らず有力な政治家を描くことそれ自体に「地球防衛家のヒトビト」はきわめて積極的である。野田の在任期間中には、国内外の多くの政治指導者が作品に登場している。本文中ですでに論及した人物以外で本論文の定義に合致する描かれ方をしていく政治家として、小沢一郎元民主党代表（2011年9月3日号、2012年5月16日号、2012年5月21日号、2012年7月4日号）、鉢呂吉雄経済産業大臣とその後任者の枝野幸男（2011年9月15日号）、リビアの最高指導者ムアマル・アル・カダフィー大佐（2011年10月27日号）、大阪維新の会代表・大阪府知事の橋下徹と大阪維新の会幹事長の松井一郎（2011年11月9日号）、チベット仏教の最高指導者ダライ・ラマ14世（2011年11月10日号）、北朝鮮の金正日朝鮮労働党総書記（2011年12月20日号）、アメリカのバラク・オバマ大統領（2012年1月16日号、2012年10月20日号、2012年11月10日号）、橋下徹大阪（日本）維新の会代表・大阪市長（2012年2月21日号、2012年10月6日号）、ロシアのウラジーミル・プーチン大統領（2012年3月7日号、2012年11月10日号）、亀井静香国民新党代表（2012年4月12日号）、ロシアのドミトリ・メドベージェフ首相と韓国の李明博大統領（2012年8月17日号）、韓国の李明博大統領（2012年8月18日号）、安倍晋三元首相と石破茂自民党幹事長など自民党総裁選挙候補者（2012年9月24日号）、安倍晋三自民党総裁（2012年10月1日号、2012年12月19日号）、石破茂自民党幹事長（2012年12月19日号）、などがある。

51 参考までに、図20にある「どじょう」（2～3コマ）は、民主党代表選（8月29日）の政見表明で野田が「どじょうはどじょうの持ち味がある」などと語った事実にもとづいており、これは新聞4コマ漫画むきの発言であったと考えられる。本論文の中編-1でも指摘したように、「アサッテ君」では首相を描いた1本を含めて4本の作品で題材とされているし、「ウチの場合は」でも扱われている。

- 52 野田の在任期間中に安倍を描いたもう2本の作品は、2012年9月24日号と2012年10月1日号に掲載されている。前者は自民党総裁選を題材に立候補者の1人として文字で描き、トーサンと新聞を読むカーサンに「政権の光が見えてきたとたんニョキニョキ出てきたみたい」と語らせている。後者では、安倍が総裁選で当選したことについて、トーサンが「中国との険悪なムード」と「安倍晋三の登場」に「不思議な既視感」を覚え、テレビ画面に映る安倍にむかって「あんたはデジャヴ総裁か!？」と問いかけている。
- 53 本論文執筆時点で、首相退任後に野田を描いている作品は確認できていない。
- 54 図24・25以外にも、少なくとも2011年12月28日号、2012年9月11日号、2012年11月10日号の作品でもナレーションが使われている。
- 55 残りの3本（2011年9月21日号、2012年3月15日号、2012年6月4日号）からは政治的な含意は読みとれない。過去には、小泉政権時に2本（2004年5月7日号、2005年3月9日号）、福田政権時に1本（2008年9月5日号）、鳩山政権時に1本（2009年11月6日号）、それぞれ「カエル」を登場させて首相を描く作品があった。
- 56 たとえば、2012年5月14日号では、テレビで「カリスマ収納名人」を見たトーサンが、「この人を総理大臣にして米軍基地をどっかに収納してもらおう!!」と提案している。2012年9月1日号の作品では、コンサートで「近いうちに卒業します」と宣言した女性アイドルに対し、同僚メンバーが「『近いうち』っていつよ!!」「早く卒業しなさいよ!」「問責決議案よ!!」などと批判を加えている。2012年9月11日号の作品では、新型のスマートフォンが次々と「バージョンアップ」されて発売されている現状と対比して、トーサンが「どこかの国のトップは次から次へと変わるのはいいけどバージョンダウンしているみたいで」と嘆いている。2012年12月8日号の作品では、トーサンが「来年の政権はどこ?」「首相は誰?」など見通しの立たない未来について思いをめぐらせている。
- 57 2007年9月15日号の「地球防衛家のヒトビト」の作品分析は、本論文前編・後注4で示した水野・福田「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（後編）」でおこなっている。
- 58 板垣麻衣子「鋭い視線の『へたうま』 漫画家 しりあがり寿さん」『朝日新聞』2014年4月28日、「春の褒章 都内75人 紫綬褒章 漫画家 しりあがり寿さん」『読売新聞』（都内版）2014年4月28日。作者自身の認識では、それでもなお「自己主張」が不十分だと考えているようで、2018年の対談で「うまくいかないこと」について問われ、「自分自身があいまいな人間なので、明確なメッセージが出せないところですかね。もやとした漫画が16年も続いてしまった。もっとはっきり書けば、それに賛同する人からは支持されるかもしれませんが、届く範囲は狭くなっちゃいそうで」と答えている。（『地球防衛家』AIにも描ける? 連載5千回? 特別対談『朝日新聞』2018年12月3日。）
- 59 河合真帆「しりあがり寿さん『僕の分身』 連載『地球防衛家のヒトビト』本に」『朝日新聞』2004年6月22日、しりあがり寿『人並みといふこと』（大和書房、2008年）、65、202。

【Abstract】

Prime Minister Yoshihiko Noda in Newspaper Comic Strips (Part 4):  
An Analysis of Comic Strips in the Three Major  
National Newspapers in Japan 2011-2012

Takeya MIZUNO

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Yoshihiko Noda during his tenure, from September 2, 2011 to December 26, 2012.

As the fourth installment of a multiple-part series, this article (Part 4) analyzes qualitatively how *Asahi*'s "Chikyu Boei Ke no Hitobito" (The Earth-Saver Family) depicted Prime Minister Noda.

The upcoming final installment will sum up the findings of the entire series and present conclusions.